

第七章 ダリアの花に題して

(三)

われわれの運命も、不幸なあるいは幸福な運命が形の世界に出来上がるまでに、心の世界にそれが出来上がり、心の世界に出来上がったフィルムが現実世界に現われてくるのであります。だから、事件が起こる前にそのとおりの光景を夢の中や、精神統一中にアリアリと見ることもできるのであります。『生命の實相』の中にも例を挙げてありますが、ある人は、水車の修繕をしている時それに捲き込まれて足に重傷を負い、ついに片脚を切断するという夢を見て、今日は危ない予感があるから、出勤しても何か故障が起きても断じて修繕すまいと思つて、水車小屋の後ろの山の中に逃げたが、山の中に材木泥棒がいたので、それを捉えようと思つて追つかけているうちにすっかり夢の中のことを忘れてしまつて、工場へ歸つたところを、のっぴきならぬ工場主からの頼みで、水車をちよつと修繕してくれと言われて、断わりきれなくて修繕をしたら、注意に注意を重ねて作業したにもかかわらず、とうとう夢に見たとおりに水車に捲かれて重傷を負い、片脚を切断せねばならないようになった。これは現実の世界にその事件が起こるまでに、心の世界に起こっていたから夢の中で見る

(154)

ことができたのだとあります。またある児童が電車に轢かれるという予告が夢の中にあつたので、轢かれないうちに一所懸命見張りをしておつたのに、ふと見張りの隙にその児童が電車に轢かれてしまったというふうな現象も書いてありました。そういうふうな心で事件以前に見たとおりが現われてくるのは、どうして現われてくるかというと、潜在意識の世界にある観念——無形の世界にある観念が現実世界に形を現わして来るといふことになるのであります。無形の世界に無形の「心」という元素で造られた心の影、心の姿、形というのがわれわれの運命の世界に出てくるわけであります。昨日も中神さんが自分の子供が突然亡くなられた話をなさいましたが、あれも別に予告現象といつてはつきりした予告現象もなかったのですが、子供がどうして死んだのであろうかと思つておられたら、妙なことにやむをえず古本屋へ出て行かなければならないような事情になつて、古本屋へ行くと、数日前に新刊されたばかりの『生命の實相』風の巻の新しいのがすでに古本屋に売っている。その本の発売元に勤めている中神さんのことです。新刊二、三日後に古本屋に読み終わるもせずに売られている古本に興味を感じて買つてお歸りになった。そして披いてみたら葉がちゃんと挟んであつて、年幼くして死ぬ児童はこういうわけであると、ちゃんとそのページに誌してあつたといふことであります。あるべき事があるべきようにチャンと手廻しができているのです。また二、三

日前にお盆ではあるし暑苦しいから髪の毛を散髪してやりた
いと思って理髪店で散髪してやったら、「これはあなたのお子
さんの初めての髪の毛ですから大切に保存しておきなさい」
と言って、半紙にちゃんと、その死ぬべき赤ん坊の髪の毛を
包んでくれて保存してある。これが今では大切な形見になっ
たのです。そういうことなんかから想像しても、その幼児の
死が起こるまでにはその死の準備がちゃんと整っているの
でありまして、これもすでに心の世界にあるべきものが形の世
界に現われて来たのであるということを知ることができるの
であります。すべて心の世界にないものは出て来ないのであ
りまして、心の世界に造られたものが形の世界に現われてく
るから、こういうことになるのであります。ですからわれわ
れは心の世界に良きものを造るように心がけなければならな
いのであります。

第八章 本来一つのもの

(七)

この釈迦と同じ悟りに達しますと、この世界がすべて神
の国土であるということがわかってまいります。神国の意義
もはじめてわかってくるのであります。国土を物質だなどと
考えているようなことでは「山川草木国土悉皆成仏」の意義
を明らかにすることはできないのであります。今までは単に
科学的立場だけでもって、この世界は物質的世界で、国土も

物質の世界であると考えられておったのでありますけれども、
そうでなしに、ありとしあらゆるものは、神の命の顕現であ
り、仏の命の顕現であり、同時にわれわれの生命と同じもの
であるということがわかってくるのであります。そこまでわ
かってきましたならば、本当に国土を愛する愛国心というも
のの本体もわかってくるのであります。さらに、先刻申しま
した植物が呼吸作用を営み同化作用を営んで、無機物の単な
る物質が呼吸作用とか同化作用とかの過程の奥に一種の神秘
的作用があつて、自己を育て生かし生長させているというそ
の神秘的働きの本体というものがわかってくるのであります。
単なる物質が生命に変化するところの過程というものがいま
でわからなかった。物質は物質であるし、生命は生命である。
なぜ御飯をたべると物質が生命に変化するかということは、
今までわからなかったわけでありまして、いっさいの
生きとし生けるもののみならず無機物までも神の命の顕現で
あり、仏の命の顕現であるということがわかってきますと、
本来物質でないものを物質だと観ていたにすぎないのであり
まして、物質と見ゆれども本来生命であるから、生命に変化
することが当然であるとかわかってくるのであります。『金剛經』
に「山、山に非ず、これを山という」という語がありますが、
「物質、物質に非ず、これを物質という」とわかってまいり
まして、今まで物質と認められていたものも本当は物質では
なく、すべて一如の生命であつたことがわかってくるのであ

ります。すべて一如の生命であつたのをわれわれが食物として食べ、それによって生き、栄養を与えられて、呼吸作用、同化作用によってすべての物質が生きる生命力に変化するこゝとがわかるのであります。そうなりますと万有引力などというものも自然と解決されてくるのであります。万有引力によって互いにひっぱり合うというのも、本来一つの生命であるからお互いにひっぱり合うということになるのであります。本来一つでなかったならば、また、生命でなしに単なる死物の物質でありましたならば、ばらばらになっていて引っぱりわけでもなければ、お互いに秩序整然として運行することもないわけであります。ここにわれわれは、この本来一つの生命というものを直覚認識によって掴むことによって、国土愛、人類愛から、その物質が生命となるという食物の同化作用、呼吸作用の問題から、万有引力問題、心臓がなぜ動くかという問題まで、ことごとく完全に解決されることになるのであります。これは要するに直覚認識によって認めえられるので、五官の認識によって、ばらばらの個人別の肉体や、個々別々に分かれている世界だけを見ているだけではわからないのであります。

第九章 親切行について

十、われらの運命は心にある

われわれの運命というものは、こういうふうな、どこから

ともなく、子孫からでも他人からでも送られてくる念波によって変化するのであります。甲を思い浮かべるのも乙を思い浮かべるのも、それはちらと頭を掠める思いであります。ほんのちよつとしたことが癩癩にさわって家庭や会社を飛び出す。いつもならなんでもないことが、ある時はとうてい耐えられなくなる。こういうちらと頭を掠める思いが人間の前途の運命を左右するのであります。どういう時に、どういうふうに心が動いてくるか、その神秘を司るものは宇宙を浮遊しているいろいろの念波にあるのです。都合の悪い人は悪い念波ばかりを感受して、せっかく、そこにいれば出世するよな所を飛び出したり、発明にも資本を出してくれそうな所へは因縁が結ばれないで、なんとなしにその人が行くと毛嫌いされてしまうような所へ、旅費を使って「資本を出してくれないか」と申し込んで、剣もホロロに断われ、そのためせっかくの発明もなんにもならないというようなことになります。このようにわれわれの運命を支配するものは不思議なちよつとちらつと頭を掠める思いです。右するか左するか、滅亡の道か、繁栄の道か、これはちらつとわれわれの頭を掠めるほんの不思議な微妙な閃きにありますので、この微妙なスイッチを司っているものはなんであるかという、この宇宙の無数のラジオのような精神波動である。その中のどの波動に感応するかということによって、良い波動を受けるか悪い波動を受けるかが定まるのであります。われわれが良い波

動を受けるにはどうしてもわれわれ自身が良い波動を受けられる良き波長を出すラジオ装置にならなければいけないのです。念波の感応は波長の共鳴によるのでありますから、自分が繁栄するには、人をよくしてあげたいという深切の良き念波を常に起こしていなければならないのです。「あの人を生かしてあげたい、この人を生かしてあげたい、深切をしてあげたい、喜ばしてあげたい」という念波を常に起こしますと、宇宙にいろいろ満ちている「生かしてあげたい」という念波がまた自分に引つかかってくるのであります。そうして良い考えが浮かんで自分の運命が自然と好転するのであります。まことに、善念は善念を招び、悪念は悪念を招ぶとは真理であります。

生命の實相 日本教分社 谷口雅春